茅ヶ崎市教育センター
Chigasaki Educational Center

子どもたちのために
ともに教育環境を考える
教育センターの教育情報誌

学びあう響きあう

第７号
平成２６年３月３１日発行

編集担当／茅ヶ崎市教育センター
住所：茅ヶ崎市十間坂三丁目５番 37 号
㏄研究研修担当（市青少年会館３階）
☎0467－86－9965
㏄青少年教育相談担当（同館２階）
☎0467－86－9963
URL　http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/13286/index.html

教育センターでは、「教育研究」「教育研修」「教育相談」の推進をしています。「教育研究」では、小・中学校の教育に関する様々な研究、幼児期の教育に関する基礎研究を行っています。「教育研修」では、研究成果を土台にした教職員の専門的な研修や市民の方々への家庭教育・幼児期の教育に関する講座などの機会を通して情報提供を行っています。また、長い歴史を持つ小学校中学校創意工夫・研究作品展も本教育センターが担当し、子どもたちの創意・研究心の育成に向けた取組みを行っています。「教育相談」では、児童・生徒の様々な悩みに応え、自律性をはぐくむ支援ができるよう努めています。

【contents】

❑　幼児期の教育についての研究から見えてきたこと（P.1）
❑　茅ヶ崎市小学校中学校創意工夫・研究作品展のお知らせ（P.7）
❑　一人で悩まないで相談しようー青少年教育相談室から（P.8）

幼児期の教育についての研究から見えてきたこと～4年目のあゆみ

思春期の親子関係の葛藤をめぐって

教育センターが「幼児期の教育に関する基礎研究」に取組みはじめてから４年になります。研究の視点は、次の３つです。

① 乳幼児期から思春期に渡る子どもが成長発達する姿を見つめ直すこと。
② 子どもが成長するための土台となる親子関係のあり方について。
③ 親が子育てをとおして、一人の大人として、自己実現をしていく姿について。

幼児期を中心としながら、胎児期、乳児期、そして児童期、青年期へとつながる子どもの成長発達する様相を明らかにしています。科学が発達したとはいえ、まだまだ解明できていないことも多いです。そして、子どもは、必ず色々な人との関係の中で育ちます。特に、親子関係は子どもにとって何よりも大切です。また、子育てをとおして得るもの、一時的には失うものもありますが、生涯発達し続ける一人の大人として、親のこころの変化、生きがいも大切です。

今回は、乳幼児期の親子関係を土台に、その後の思春期の親離れと子離れの親子関係での様々な葛藤に焦点を当てていきます。

思春期の親離れと子離れ

－家族の絆・地域のつながりの視点から－

「子育ち・子育て出前講座【思春期編】」より（講師 北島歩美氏，演題「思春期の親離れと子離れ一家族の絆・地域のつながりの視点からー」，教育センター主催，香川小学校区青少年育成推進協議会共催 H26.2.23 開催）

北島歩美氏は、日本女子大学カウンセリングセンター准教授であり、臨床心理士として学生をはじめとする色々な方々のカウンセリングを行っています。

今回は、思春期の親子関係をめぐる様々な葛藤について、どう乗り越えていくか、そのヒントをいただきました。

【アイデンティティの確立】

現代の学生の特徴は、次の３つが挙げられます。

①　自分の気持ちに気づかない。
②　助けを求めない。
③　他者優先。

①については、自分が今後どうしたいのか、例えば、どんな進路を選択したいのか自分の考えが持てず、時にあきらめてしまうなど極端な結論に至ることもあります。②については、悩みを抱え込んだまま、誰にも助けを求めず、問題が深刻化してしまうケースもあります。③については、自分の考えではなく、「他の人がどう思うのか？」を優先したり、時には、過剰適応といって他者の希望を優先するあまりに、自分の能力以上の仕事などを引き受けたりして、疲れ果ててしまうこともあります。

いずれの悩みにしても、「自己」

について語るという経験が不足しています。人間というのは、他者の反応を見て、「自分とはこういう人間なんだ」と分かっていきます。ですから、自分について語る経験が少ないと、自分はどんなことが好きであるか、どんな性格なのか、といった自分自身に関すること、つまり「自己」の発見が非常に遅くなります。

では、なぜ思春期から青年期に自分について考えることが大切かというと、この時期のゴールが「アイデンティティの確立」だからです。これは、「自分についての発見」、「自分自身についての納得」を指します。具体的には、家族から離れて自立するということや、自分の特性や限界を踏まえた上で進路の決定をするといったことです。そして、生活や仕事の場（所属コミュニティ）を選択することも含まれます。また、社会には２２歳頃にその後の進路という一つの選択をしなければならないという枠組みがありますから、アイデンティティの確立はとても大切なのです。

【親子関係の変化】

次に、親子関係の変化に目を向けてみます。青年期までの間に親子関係は、とても変化すると言われています。ここでは、研究で明らかになっている次の二つの視点から親子関係の変化を見ていきます。

① 「子どもから見た親子関係の変化」

思春期前（小学校まで）は、親は「守ってくれる」、「理解してくれる」、「頼れる」存在として感じています。これは、上下関係的な安定した関係です。

そして、思春期を越えた青年期以降では、「信頼してくれている」、「人間として尊敬」、「自分を頼る存在」、「相談できる人生の先輩」という存在として、これも安定した対等な関係になってきます。

しかし、これら思春期前と青年期の間の「思春期から青年期」では、いろいろな変化が起きます。子どもからすると、「分かってくれない」、「理解がない」、「壁として感じる」というように、親に対して負の感情を抱き、特に中学生は負の感情は強く、混乱しています。

② 「親からみた親子関係の変化」

思春期前（小学校まで）までは、「かわいい」、「保護が必要」、「一人ではできない」と親は子どもに対して思っており、安定した関係にあります。

そして、思春期を越えた青年期以降は、「一人の個人として理解」、「どうにか自分でやってくだろうという信頼感」、「対等な関係」というように、こちらも安定した関係となります。

しかし、これら思春期前と青年期の間の「思春期から青年期」では、「反抗的だ」、「見通しが悪い」、「理解が足りない」、「行動が伴わない」というように、子どもに対して批判的になりがちです。

【親子の現実的な葛藤】

こうした「思春期から青年期に渡る親子関係」の中で、具体的に次のようなコミュニケーションがしばしば家で起きているかと思います。

≪例１≫

【母】「いい加減に勉強しなさい」
【子】「今やろうと思っていたのに」
【母】「そんなこと言ったってやらないでしょ」
【子】「うるさい！」

このやり取りの中では、母は、「言わないとやらないだろう」と思い、子どもの方は「親がうるさいからやれない」と思っています。つまり、母の方は、「過剰責任」といって、子どものことをもう少し抱えててあげないと自立できないと感じ、子どもの方は、「責任回避」といって親に言われるからますますやりたくないと思っているわけです。

今度は、よくある父親の例を挙げてみます。

≪例２≫

【父】「携帯を使いすぎだ！」
【子】黙って携帯をいじる
【父】「いい加減にしろ！」
【子】無視して部屋を出て行く
【父】「あいつは全くだめだ。（母親に）どうにかしろ！」

このやり取りの中で父は、命令すれば従うはずで、コントロールできるはずだという思い込みがあります。子どもの方は、親父は言っているだけで、聞き流せばいいというように、コントロールへの抵抗を示しているわけです。

これら２つの例のいずれも、同じパターンを繰り返し、循環しています。これを心理学では「円環的循環」と言います。こういう場合、気づいた方が別のコミュニケーションの仕方を考えることが必要です。例えば、親の方が命令しても子どもは言うことを聞かないと気づいたならば、命令するのをやめてみる、あるいは頼んでみるといったことです。

とはいえ、この二つのコミュニケーションは、思春期に起きる極めてノーマルなやり取りです。こうしたやり取りが出てきたならば、そろそろ自立の準備ができてきたということです。

なぜかというと、子どもの側は、自立と依存の間で揺れ動いているという葛藤が生じているからです。例１では、口では「放っておいてくれ」と言いながらも、親に言われないと実際にはやれないというように、両方の気持ちがあります。例２でも、黙って部屋を出て行くということは、まだ父親と真正面から向かい合えないという不安感が表れています。

一方、親の側は、解決を肩代わりしてあげなければいけないと

思っています。つまり、例１では、「この子の成績が悪くなったら親である私のせいである」と思っています。例２では、父親が携帯の使い過ぎだと言いつつも、携帯電話の代金を自分で払えとは言えないわけです。また、この時期親は、子どもから拒否されることへの不安を感じ始めます。つまり、今まで親子の上下関係が安定していたのに、子どもに拒否されると、「今まであんなにいい子だったのに…」、「こんなに暴力的な言葉は言わなかったのに」と傷つくわけです。そうすると、親としての自信も喪失し、自責の念やそれまでの子育てが間違っていたのではと感じてしまいます。

実は、こうした親側の葛藤の心理こそ、子どもがうまく育ってきたという証拠なのです。自立の時というのは、親を混乱させ、不安にさせます。その結果、両者が絡み合って、父親と息子が険悪であるとか、母親と娘が口をきいていないといった葛藤や喧嘩として家の中で色々なことが起きるわけです。こうした両者の関係は、「正常なプロセス」です。こうした葛藤が出てきたということは、親が「安全基地」になっている証拠なのです。子どもがある種の心の揺れ動きを親に表現できるということは、親が親として機能している証拠になります。親が親として機能していなければ、子どもはこうした不安感を表現せず、とても「いい子」として振る舞います。子どもが親を安全基地として認識していなければ、安心して反抗もできない、安心して否定的なことも言えないということになります。

【社会に出る力を育てるために】

社会に出る力、つまり心理的な自立をさせるために何が必要かというと、大きく分けて次の二つの方向があると言われています。

① 安心できる関係（安定したアタッチメント）

子ども自身が、危機的な状況になったとき、つまり「危ないな」と感じたら「助けて」と言える関係です。とはいえ、危ないときに、「助けて」とはなかなか言えないものです。子どもが「助けて」と言えるためには、親は常日頃から子どもを理解し、肯定してあげる関係を築いておくということが大事です。

② 自分作り（自己分化･個体化）

自分と他者との違いを認識して、他者つまり家族や友人といても「自分」でいられる関係です。冒頭に述べた、「他者優先」や「母親」のことばかり優先して、自分のことは後回しという関係ではなく、どんなグループの中にいても、安心して「自分」でいられるという関係のことです。そのためには、自分と他者の違いを分かっていること、「自分は自分である」という感覚を持っていることが大事です。

この「安心できる関係（安定したアタッチメント）」と「自分作り（自己分化・個体化）」は、実は図１のように循環しています。では、この２つのことがどのように関わり合っているか詳しく見てみましょう。

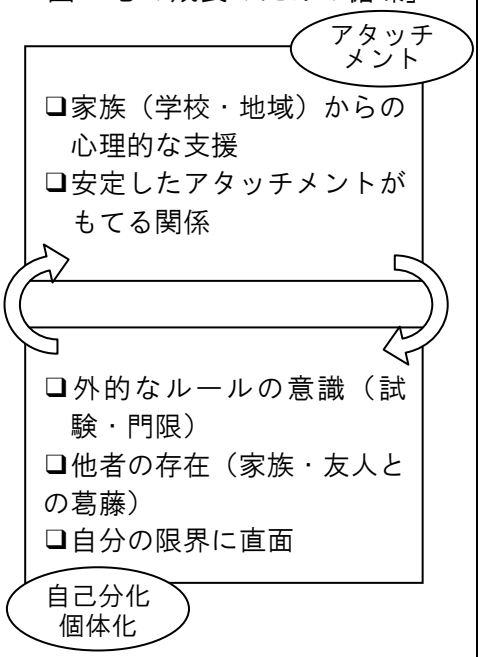
①の「安心できる関係（安定したアタッチメント）」は、常日頃、家族、学校や地域からの心理的な支援をもらえていたり、安定したアタッチメント、つまり理解し、肯定してもらえる関係が日常的にあって、子ども自身が「危ないな」と感じたときに助けてもらえる関係です。

そして、②の「自分作り（自己分化・個体化）」について、この時期に外的なルールが意識されることと関連しています。例えば、試験や門限などです。こうしたルールの中で、自分の個性が分かってきます。中学生くらいでは色々な教科がありますので、試験をとおして自分の得意なことや苦手なこと、そして自分が評価される点が分かってきて、現実的な自分が分かってくる時期です。そして、他者（家族・友人）との葛藤が当然出てきます。友だちグループの中で自分は低い位置にあるかもしれない、もっといい友達がほしい、いじめられたらどうしようという色々な葛藤が起きてくるわけです。そういったことを含めて、自分の限界に直面していく時期になります。

つまり、家族の中で守られていた子どもが、次第に社会、学校の中に一人で出て行ったときに、色々なストレスが覆いかぶさってきては、「自分ってどうなのかな、ちっぽけなのかな」、「人から見たらどうなんだろう」など色々な形で不安になってくるわけです。こういったことが、「自己分化・個体化」、つまり「自分作り」に役立ってくるわけです。

しかし、この「自分作り」の過程では不安が大きいので、また家族の中に戻ってきて、「お母さん、私大丈夫？」と胸の内を話したり、イライラをぶつけてきます。そこで、安定したアタッチメントがもてると、また学校に行って色々なことにチャレンジできるという循環が起きてくるのです。

「図１.心の成長のための循環」



【アタッチメントとは？】

これまでのお話の中に出てきました「アタッチメント」という言葉について説明します。

アタッチメントとは、次のように定義されています。

「個体（私たち）がある危機的状況に接し、あるいは、そうした危機を予測し、恐れや不安の情動が強く喚起された時に、特定の他個体への近接をとおして主観的な安全の感覚を回復、維持しようとする傾性（数井・遠藤、2005）」

ちょっと難しい定義ですが、私たちが何か不安になった時に、自分を信頼してくれる人、自分のことを認めてくれる人に、くっついて安心を得るということです。赤ちゃんを思い浮かべてみると分かると思いますが、赤ちゃんが泣いたときにお母さんのところに戻して抱っこされると、泣きやむということがあります。主観的な安心の感覚というのは、「私はＯＫ！」ということです。

このアタッチメントは、はじめは赤ちゃん研究から始まり、イギリスの精神科医であったジョン・ボウルビーがその理論を考案しました。そして、ボウルビーは1973年に思春期のアタッチメントに関して、次のように述べています。

「安心の基地や家族の強力な支持は、これまで子どもの自立心を弱めるとされてきたが、今後は、それを大いに促進するものとして考えるべきである」

つまり、安心の基地や家族の強力な支持があれば、自立心をもつようになるということです。これは、甘やかすこととは違います。人に頼る能力は、自立心と補完的な関係にあるということです。

こうしたアタッチメントは、思春期以降も大事です。もう一つ付け加えると、中年期以降、老人になっても私たちは死ぬまで、精神的健康を維持するために大事であると言われています。ですから、夫婦関係、親子関係、家族の関係、あるいは支持や安心感は、私たちのメンタルヘルスに大きく影響を及ぼしています。

ただ、アタッチメントは、年齢に伴って形が変化し、幼い子どもと思春期・青年期では、形が違います。幼い子どもは、親に対する接近、だっこなどの身体的接触、そして親の保護によって「自分は守られている」という感覚が得られます。しかし、思春期・青年期ではそうではなく、相手が話を聞く態度、ありのままを受容してくれる、自分のことを理解してくれるといったことが大切です。

冒頭に述べた「自分を見つめてこなかった子ども」というのは、誰にも話を聞いてもらったことがないし、自分のことは誰も分かってくれないと感じている場合が多いです。

【自己分化・個体化の促進】

次に、「自己分化・個体化」についてもう少し具体的に述べていきます。大きく２つの方向性があります。

１つ目は、思春期から青年期になると、社会の枠組みと直面化する状況が起きてきます。例えば、悪いことをしたら叱られるというのはもちろんですが、ある程度の成績をとらなければいけない、アルバイトのこと、門限のことなどについて、親や周囲の大人から言われるということです。このルールというのは、非常に大事です。このルールを伝えないと、「自分中心でいい」という行動になって表れてきます。

こうした枠組みやルールを通して、先生や親と自分の立場の違いを認識していきます。そして、自分の外側にルールがあることを意識し始めます。また、自分の気持ちと他者の気持ちが違うということ分かってきます。

こうした経験を通して、「幼児的な自己中心性の転換」が起きていきます。つまり、世界は自分中心で回っていないことを自覚します。幼児というのは、良くも悪くも自分中心に世界が回っていると感じ、何か事故が起きても自分のせいだと思ってしまいます。思春期になると、物事を客観的に捉えられて、自分以外のところで世界が回っていることが分かってきます。

２つ目は、自分の限界についての直面化が起きます。失敗や挫折経験は、親としては避けさせてあげたいのですが、成長にとっては大事です。その失敗や挫折によって、自分の特性を理解していきます。先ほどの幼児的な自己中心性とも関連しますが、何でもできるという万能感を喪失していきます。この転換というのは、無力感と孤独感を非常に掻き立てます。

【思春期の育ちを支えるよい循環】

このように現実と直面して挫折感や不安感、無力感が掻き立てられます。挫折感や不安感を抱いたときには、安全基地である家族や先生に訴えて、サポートをもらっては、また無力感や挫折感に向き合えるという循環を起こしていきます。簡単に言えば、現実に直面しながら自分づくりをし、もう一方で、誰かに相談して、「結果が出なくてもあなたはあなたなんだから大丈夫！」、「誰でも不安だよ」、「いつでも相談においで」と働きかけてもらうことでエンパワメント（元気の回復）されていきます。そうすると、「現実」に打ち勝とうとするようになり、良い循環が生まれていきます。

【よい循環を阻むもの】

しかし、よい循環が生まれないということも当然起きてきます。これまで述べてきたように、次の２つの視点から 良い循環が起きなくなってしまいます。

１つ目は、「アタッチメント」の問題です。色々な理由で親子関係に緊張感があって、親に不安を語れない、あるいは親の心理的な世話をしなくてはならないということでサポートを得られない状態になっていることが挙げられます。

２つ目は、「現実との直面」ができておらず、枠がなく、現実回避をしてしまうということです。甘やかし、親が子どもに操られる、親が子どもの代わりに解決するので不安感、挫折感を子どもが受け止められないといった状況です。こうなると、その子の挫折がいつまでも先延ばしにされてしまい、次の挫折が降りかかってきたときにもっと大きな挫折になってしまいます。挫折というのは、小さなうちに一つ一つ解決していくことが大切です。

養育者だけでなく、子どもを取り巻く大人側の環境が不安定だと、この２つの理由でよい循環が生まれないのです。

具体的に悪循環の例について述べてみます。子どもが何らかの不安感を抱いたとします。そうすると、反抗や、家出、成績不良、パニックなど色々な形で表れてきます。この不安感、行動は親に対してのアタッチメントの充足行動であり、不安だから慰めてほしいという現れです。ところが、親の方がうまく受け止められなくて、「私の子育てが悪いというのか」、「他の子は上手くやっているのに、どうしてできないのか」、「いつか分かるだろうから放っておこう（回避）」という気持ちになってしまうとその結果、叱責、拒否、言いなりといった行動を取ります。そうすると、結果的に子どもに負荷がかかり、頑張り過ぎ、怒り、無気力などが起き、そして、子どもがさらに不安になってしまうのです。

では、よい循環の具体的な例を見てみます。子どもが失敗、傷つき、迷いなどで不安になると、親や先生にアタッチメントの充足を求めます。例えば、不安だから話をしたくなります。ルールを守ることの大切さをしっかりと示したり、それと共にいたわりや共感といった親の安定した態度を示していく。そこで子どもの不安に対して、「大丈夫だよ」、「そんなに心が揺れる必要はないよ」、「次はこうしてみようか」、「味方だよ」などと色々な形で伝えて不安への手当をし、保障していきます。そうすると、子どもは受け入れられたという実感をもち、安定していきます。そして、子どもは自分の様々な課題に取り組んでいきます。

安定しているか、不安定かを見つける一番の視点は、子どもの場合は特に、物事に「熱中」しているかどうかです。安定していると、勉強、スポーツ、友だち関係など自分自身の活動に集中し、熱中していきます。熱中できると、子ども自身が喜びを感じ、自己実現へと向かっています。私たちの人生の最終ゴールは、「自分らしくありたい」という自己実現への欲求へと向かっていくことです。安定した子どもは、この自己実現に向かっていきます。

【地域としてできること】

演題にある「地域としてできること」は、親が子どもに安定した関わりができるような支援、ソーシャルサポートとしての役割です。子どもは学校など居場所がありますが、意外に母親は居場所がなかったり、父親も会社で仕事の話が中心で、子どものこと、家庭のことが話せなかったりしますので、親の心理的な安定のために支援やソーシャルサポートが必要になってきます。

【自立について】

ここまで、自立をめぐってお話をしてきましたが、自立に関する間違った信念を学生や親がもっていることがあります。例えば、次のようなことです。

△ 自立とはたった一人で誰の援助ももらわず生きることである。
△ 自立とはある年齢（18歳～20歳）に至れば、自然と生じるので、放っておけばいい。
△ 自分の問題に気がついたら、次の日からでも行動を起こし、行動を改めることができる。
△ 自立とは本人のやる気次第であり、周りは関わることはできない。（待つしかない）

どれも、本来の自立とはズレていると思います。では、「自立の現実（本来の自立）」をいくつか挙げてみます。

❍ 自立とは、一人で生きることではなく、周りの助けを借りながら共存できることである。
⇒相談行動や誰かの助けを求めることができるというのは、立派な自立行動のうちの１つです。自分の現状を把握できていないと相談はできないからです。
❍ 自立とは、年齢によって生じるのではなく、本人の身体的心理的準備が整った結果として生じる。つまり、旅支度が整ってこそ、自立という旅に出るということ。
❍ 自立とは、発達段階が積み上がった結果生じる長期的なプロセスである。思春期になって青年期へと至る親子の葛藤の中で、おおよそ10年くらいかかる。
❍ 自立に関して、家族やコミュニティは支援的に関わることができる。周囲の大人の意識が変わり、環境を整えることが大切である。

【思春期の子育てのために】

思春期の子育てのために大切なことを３点挙げました。

① 共感力

アタッチメントという意味で、子どもの立場になって想像する共感力が必要です。叱る前に一息つき、子どもなりの言い分を聞くという態度です。これは、親や地域に枠組み（ルール）を維持する力があっての話です。

② 安定感

子どもなりの言い分を聞くことが大切と上述しましたが、聞いているうちに親御さんがだんだんイライラしてくることがあります。ですから、親自身の安定感、メンタルヘルスをきちんと保つことが必要です。子どもが思春期になるとき、親、特に母親は更年期であることが多く、なかなか不安感をコントロールできない場合があります。そうした時に他のサポートをもらいながら、安定した対応をしていくことが必要です。また、親自身のイライラ感、不眠、だるさに気づくことが大切です。

③ ネットワーク

一人で抱え込まずに支援を得るということです。これは、夫婦、友人、実家、学校、カウンセラー、医者などに相談していくということです。

具体的な対応策として、１つ目は子どもの話を聴くことです。子どもの立場に立って、そして子どもに関心をもって聴くということです。このことは、子どもの側のアタッチメント充足につながります。２つ目は、親自身の不安を語れる場所を探すことです。「子ども以外に自分の悩みを語れる相手」を探し、親自身のサポートネットワークをつくっていくということです。そして、「親自身の居場所」を見つけるということです。子離れというのは、今まで築き上げてきた家族が大きく変化する時期です。そうした時に、親が子どものアタッチメントの対象になれないということは、親自身も自分の居場所がないということでもあります。子どもの自立後の家族のステージに向けて、親自身が柔軟に成長する必要があります。そうすることで、子どものアタッチメントを満足させて、ルールを提示していくことができるという循環が起きていきます。

【最後に】

- ❑ 子育ては長い作業だが、いつかは終わりがくるものと認識すること。親役割はいつか終わるということ。思春期の葛藤や課題を先延ばしにしていくと、高齢の親子が親離れ･子離れしないままになってしまう現状もあります。
- ❑ 子どもにどのような人になってほしいか考えながら関わることが大切です。家庭によってルールは異なるということもあるので、しっかりと話し合う必要があります。
- ❑ 家庭だけではなく、社会の力を使って子育てすることが、子育て力を上げることにつながります。
- ❑ 決して急がないことが大切です。

※参考文献
・「相手の気持ちをきちんと聞く技術」、平木典子、ＰＨＰ出版
・「家族の心理」、平木典子・中釜洋子、サイエンス社
・「アタッチメントの実践と応用 医療・福祉・教育・司法現場からの報告」数井みゆき、誠信書房
・「こころの育て」、河合隼雄、朝日新聞社
・「家族関係を考える」、河合隼雄、講談社現代新書

最後に…
思春期の子育ち･子育てから見えること

思春期の子どもたちの様相で特徴的であり、話題になりがちななことは「反抗期」です。北島先生は、反抗期という言葉を用いず、子どもたちのこころの中で何が起きているのかを丁寧にご説明くださいました。親からすると、思春期の子どもたちの態度は「反抗」として映ることでしょう。しかし、子どもからすれば、劇的な身体的変化だけでなく、社会の入り口を前にして、自分の小さな存在に気づき、この先どう歩んでいけばいいのか途方に暮れているのでしょう。

子どもにとってのアタッチメント、それは「こころの母港」であるように思います。疲れ果て、感情のコップが空っぽになった時に、しっかりと燃料補給してくれる場所です。これは決して「甘え」ではありません。生物が生命の危機を感じた時に心身ともに安定さを維持しようとする極めて生物学的な欲求です。

一方で、北島先生が述べたように、社会のルールと直面し、思春期に葛藤するというのは重要なことです。そして、周りの大人がその枠組みを変えないという信念と安定さがカギになると思います。

【研究研修担当】

茅ヶ崎市小学校中学校 創意工夫・研究作品展のお知らせ

New!! 平成２６年度 第４３回 作品展のご案内

平成 26 年度は、第 43 回を迎えます。小・中学校の先生方が中心となって運営し、各学校をとおして作品を募集します。茅ヶ崎市在住、在学であれば、私立の小・中学校に通う児童・生徒の作品も受け付けています。

作品展の開催日時・会場

- ❑ 9 月 12 日（金）・13 日（土）・14 日（日）の 3 日間
  いずれも 9 時から 17 時まで
- ❑ 茅ヶ崎市青少年会館
  （十間坂三丁目５番３７号；梅田中学校前）

２ つ の 部 門

作品展には２部門あります。

❑ **創意工夫作品部門**

普段の遊びや生活の中から、こんなものがあったらいいなあと思うことを工夫して作り出したもの。

❑ **研究作品部門**

理科的な内容や社会科的な内容など、観察や実験、調査したものをまとめたもの。

作 品 応 募 の 手 順

① 夏季休業を利用して創意工夫作品を製作、または自由に課題を選び研究します。

② 作品は各学校の担任の先生に出品します。茅ヶ崎市在住、在学で私立の小・中学校に通う児童・生徒の皆さんは、直接教育センターに出品します。

③ 各学校と教育センターで事前選考があり、事前選考で選ばれた作品が、作品展に出品されます。

詳しくは、７月上旬に市ホームページで紹介します。

平成２５年度 第４２回 作品展の様子

「不思議と驚きからそうぞうタマゴ～想像と創造のこころ」

第 42 回作品展テーマは、“不思議と驚きからそうぞうタマゴ想像と創造のこころ”。素敵な作品が集いました。

出品作品数は、各学校から選ばれた創意工夫作品部門 240 作品、研究作品部門 284 作品、合計 524 作品でした。作品展審査会で、金・銀・銅・努力賞を選考し、展示されました。

作品展は、平成 25 年 9 月 13 日（金）から 15 日（日）の 3 日間、市青少年会館で開催されました。3 日間でご来場された方々は合計 2,424 名ととても多くの方々にお越しいただきました。

展示されたお子さんの作品を家族で見に来られた方々、友だちの作品を見に来た子どもたち、来年の参考にと見に来られた保護者の方々など、会場はにぎわっていました。そして、お孫さんの作品を見に来られた祖父母の方々が、お孫さんの頑張りにほほえんでいらっしゃったお姿が印象的でした。

平成 25 年度作品展の様子

創意工夫作品部門優秀作品が、「第 72 回神奈川県青少年創意くふう展覧会」へ

創意工夫作品部門優秀 27 作品が、**第 72 回神奈川県青少年創意くふう展覧会**（主催神奈川県／一般社団法人神奈川県発明協会）に出品され、結果は次の通りです。今年度は、特別賞に５作品、優良賞に５作品が受賞し、例年以上の好成績を収めました。

【発明協会会長奨励賞】
「おじいちゃんのためのソックスマシーン」
緑が浜小学校２年　横山夕夏さん

【日刊工業新聞社賞】
「モーターダンスロボット」
緑が浜小学校 3 年　市川南瑠さん

【神奈川県発明協会会長賞】
「ぐるぐる遊園地」
緑が浜小学校 4 年　吉田遥南さん

【毎日新聞社賞】
「水アカのつかない歯ブラシ立て」
松林小学校 5 年　西田雛乃さん

【県知事賞】
「温度感知型扇風機」
松林中学校 3 年　福島ももこさん

【優良賞】 5 作品（5 名）
【努力賞】17 作品（17 名）

研究作品部門優秀作品は、「第 31 回全国小・中学生作品コンクール」へ

研究部門優秀 27 作品は、**第 31 回全国小･中学生作品コンクール**（主催子どもの文化･教育研究所）に出品され、結果は次の通りです。

【理科部門：全国中学校理科教育研究会会長賞】
「体感温度の研究～ガイナ塗料を使って～」
第一中学校１年　豊嶋駿瑛さん

【奨励賞】 26 作品（26 名）

【研究研修担当】

一人で悩まないで 相談してみよう
青少年教育相談室から

生活する中で、友だちとの関係に悩んだり、自分に対して否定的な感情を抱いたりすることは、誰にでもあることです。でも、その時はとても苦しく、自分を見失いそうになることもあります。

決して一人で悩まないでください。本センターの青少年教育相談室では、お子さん自身の悩み、保護者の方々の悩みに寄り添い、お力になりたいと思います。

各種相談を電話・面接（来所）で行っています。相談の秘密は守ります。お気軽にご相談ください。

面接は各相談電話で予約してください。

電話相談・面接予約

- 月曜日から金曜日
  （休日及び年末・年始を除く）
- 昼間：9 時から 17 時
  各電話で受け付けます。
- 夕方：17 時から 18 時
  電話：0467-86-9963 で受け付けます。

相談スタッフ

青少年教育相談員
（臨床心理士・教職経験者等）

相談の方法と内容

1　電話相談

【一般教育相談・青少年相談】
電話：0467-86-9963・9964
勉強や進路のこと、親子関係、非行や将来への不安などの悩み。

【「こころ」の電話相談】
電話：0467-57-1230
学校に行きたくても、行くことができない。すぐにいらいらしたり、落ち込んだりする。お子さんの不登校などにどう対処したらよいかという悩み。

【「いじめ」電話相談】
電話：0467-82-7868
「いじめ」の場面を見たり聞いたりした。「いじめ」への対処をどのようにしたらよいかなどの悩み。

【特別支援電話相談】
電話 0467-86-1062
お子さんに友だちができない、落ち着きがない、学習のつまずきがあるなどの悩み。

2　面接相談

電話 0467-86-9963・9964
（予約制）
いじめ・不登校など、電話では相談しきれない内容やじっくり時間をかけて相談したい内容について、専門の相談員が、問題解決に向けて一緒に考えます。継続的な相談に応じています。電話で予約をしてください。

3　小・中学校要請教育相談

「２面接相談」を受けている小・中学生を対象として、保護者の要請により、専門の心理相談員が学校を訪問します。子どもの様子を把握し、学校の先生も交えて相談を行います。

不登校児童・生徒訪問相談

不登校あるいは不登校傾向にある小・中学生のご家庭に、お兄さんやお姉さんのような年代の訪問相談員が訪問し、相談を行っています。相談員が気軽な話し相手、相談相手となり、子どもの生活状況の改善を目指し支援をしています。

あすなろ教室入室のご案内

学校に行きたくても行かれない小・中学生の皆さんが、心を休め、自分らしさを大切にしながら学べる場所です。お子さんが学校に戻って楽しい学校生活が送れるようにお手伝いします。

通室生は、自分らしさを大切にしてゆっくりと自分の生活を作り上げながら、集団生活に対する自信を深めることを目指して活動しています。

一人ひとりが課題を決めて自分のペースで学習を進めるだけでなく、ゲームや体験学習といった興味ある楽しい活動を通して視野を広げ、人間関係を作り上げる力を養っていきます。

各小・中学校の　心の教育相談室

名称は様々ですが、各小・中学校に子どもたちが自由に利用できるホッとできる空間（部屋）があります。そこに、週３日程度、心の教育相談員がいて子どもたちの話し相手や、ちょっとした相談を受けています。子どもたちの悩みやストレスを早期に発見・対応し、安心できる過ごしやすい学校生活を提供できるように努めています。また、月に数回、スクールカウンセラーという専門の心理カウンセラーが勤務します。子育てや教育に関する相談を受けています。相談希望のある保護者の方は、学校にご相談ください。

【青少年教育相談担当】

編集担当／茅ヶ崎市教育センター
☎　研究研修担当（市青少年会館３階）
☎0467－86－9965
☎　青少年教育相談担当（同館２階）
☎0467－86－9963
茅ヶ崎市十間坂三丁目５番 37 号
URL　http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kyouiku/13286/index.html